（別紙２）

審査結果の要旨

氏名　山口　裕之

本論文は、コンディヤックの仕事を、ニュートン物理学の方法を他の分野に拡張することで諸科学が近代科学として成立してくるという科学史の流れの中に位置づけ、分析という方法の重要性とその内実、それが含む諸問題を、つぶさに検討した労作である。コンディヤックの伝統的解釈は、それをフランススピリチュアリスムの展開と関連づけ、分析を重視し汎論理主義に傾く点で批判されるべき心理学と位置づけるものであったが、当論文は、その対蹠に立つものである。

第1章はコンディヤック思想を論ずるに当たって取るべき視角を論じ、第2章は、論じられるべき諸問題を概観する。第3章は、知覚と観念との関係、単純観念と複合観念との区別、そして抽象観念、一般観念といった近代哲学の道具立てが、コンディヤックにおいてはどのように考えられているかを、その混乱をも含めて解明する。新鮮な論点は、知覚に即した観念の成立における欲求という契機の働きと実験的手法の介入という二つの事柄を適切に摘出し、これを分析という方法の内実を示す第一歩としたことである。

第4章、第5章は、知覚との関係に焦点を当てて観念の位置を論じた第3章に対し、記憶との関係で観念を取り上げ、そこで働く記号の役割をコンディヤックがどのように考えているか、検討している。そのうち第4章は、記号が観念を成立させるというコンディヤックの主張を取り上げ、まず、記号を操作することで記憶作用が成立し、対象そのものではなく観念を扱うことが可能になることを示した。次いで記号の発生に関するコンディヤックの議論を精査して、それを通じ、記号による観念の形成という問題に一定の展望を与えつつ、その困難をも指摘し、そこで、記号の習得という場面に目を転じて、そもそも記号の発生の議論とは何を論ずるものであるかを検討することが課題となることを示し、かつ、一般に何かの発生や生成を論ずることがもつ構造を明らかにするという作業の地盤を切り開いた。続く第5章は、記号の自由な呼び戻しと記号による観念の自由な呼び戻しという論点を扱い、諸観念の秩序だった認識と操作とは諸記号をつくる秩序によって保証されること、諸記号の秩序は、習得され、かつ改良される体系として考えるほかないこと、諸記号と諸観念との明晰な体系性は分析という方法と不可分であることを、コンディヤックの影響を受けたラヴォアジェの化学理論の検討をも援用しつつ、示した。なお、コンディヤックの枠組みにおける自由というものの内実を、第3章での欲求の議論につなげて、一方では実践的認識と理論的認識との区分の生成と関連づけて、他方では、認識の拡大につれて隷属から自由へと連続的に移行するような仕方で作用する精神として思い描かれたコンディヤックの人間像を炙り出す仕方で、説得的に浮かび上がらせたのも、本章の功績である。

最後の第6章は、記号のおかげで可能になる諸観念の分析が、当然に再構成の手続きを引き連れて諸観念それぞれの形成順序を明らかにしつつ体系をつくってゆき、そのことでもって認識が進展してゆくという、前章までの議論が示したことを踏まえ、しかしながら、その場合の諸観念の形成順序の意味とは何なのか、という、科学の方法のみならず内容の内実にも関わる大問題が残ることを指摘し、それに答えることを目指す。それは、コンディヤックの心理学自身を体系的認識の一例として俎上に載せ、もう一度、彼の人間像がどのようなものであったかを抉りだしつつ、一般に、構成要素の組み合わせによって対象を再構成するという体系の順序は、具体的な対象そのものの生成順序なのではなく、対象について或る観点から見たときの一般的なモデルを形成するための順序であることを示す。

以上のように、本論文は、近代諸科学の進展に際して、当時、最良の方法論を示したと目されたコンディヤックの思想を多岐にわたって考察し、一見した単純さの背後に豊かな問題群を見いだし、それらの解決に努力し、大きな成果をあげたものである。そこには、終章での体系の原理に関する議論、すなわち、説明するものと説明されるものとの関係についての議論に、それまでの実験的手法の意味についての考察を活かし切れない甘さが残るという欠点はあるものの、全体として、コンディヤックの仕事の意義を明確に描き切り、かつ、近代科学が前提する方法論についての理解を深めるという観点から見て現代的な意義をも有する、内容の濃いものである。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに値すると判断する。